

自己メディア論から地域の自己メディア論へ  
—— 〈地域と文化〉のメディア社会学：その1 ——

加 藤 晴 明

『中京大学現代社会学部紀要』 第9巻 第1号 抜 刷

2015年9月 PP. 1~32

# 自己メディア論から地域の自己メディア論へ

—— 〈地域と文化〉のメディア社会学：その1 ——

加 藤 晴 明

## 1 節 自己メディア論という起点

- 自己メディア論とは
- 文化装置と下位概念としての物語装置
- 情報概念と物語概念
- 物語論・自己物語論の示唆

## 2 節 〈地域と文化〉のメディア社会学へ

- 地域のメディアは、地域の物語装置である
- 奄美の〈地域・文化・メディア〉に焦点を当てて考える
- 既存の研究を超えて
- 媒介概念としての〈自己コンテクスト性〉
- 地域のメディア社会学
- 文化のメディア社会学

結び

## 1 節 自己メディア論という起点

### ●自己メディア論とは

「メディアとは自己を仮託する文化装置である」という命題のもとに展

開されたのが自己メディア論（加藤晴明、2012）である。それは、メディア空間に氾濫する自己語りを捉える視座として提起された命題であった。ネット空間をめぐっては、「つながりの社会性」を強調するコミュニティ論系の解釈フレームが定番となっている。これに対して主観主義という批判を浴びることを想定しつつも、あえて意図的に自己を起点としたメディア行為論を提起したのである。そこには、メディアで情報発信する“当事者たち”の表現行為を起点にするという立ち位置の選択があった。

自己メディア論の視点は、メディアを単なる情報の媒介物や情報発信の装置としてだけではなく、“自己”と深く関わる表現装置として捉える視点であり、そこではメディアは、記号表現を通じて、不可視のなにかであるアイデンティティに輪郭を与える装置、つまり自己を仮託する文化装置として位置づけられた。文化装置は、自己語りの装置という側面に限定して捉え直せば“物語装置”ともいえる。

ただ、自己メディア論で使う場合の物語は、作品・コンテンツの制作という狭義の意味ではなく、物語る行為の総域、とりわけ自己に関わる語りとしての“自己語りの総体”の意味である。また、ストーリー作家や研究者・専門家を起点にした物語生成ではなく、ひろく市井の人びとの自己の物語生成を想定している。今や誰もが、ネットで自己物語をつづる時代である。ストーリー作家が描く、狭義の物語を超えて、生活のひろい領域での多様な自己語りの断片や実践にこそ自己語りという行為の広い裾野があると考えられるからである。

一般には、「物語」とは、「2つ以上の出来事（events）をむすびつけて筋立てる行為（emplotting）」として定義される（やまだようこ、2000、3頁）。しかし、重要なのは、やまだも指摘するように物語化なのである。物語化によって自己の輪郭を浮上させるメディア行為、これが自己メディア論が対象にしてきた自己語りである。

20世紀終盤から21世紀にかけて、こうした自己と物語を融合させた自己物語論が盛んに提起された。それが提起したのは、「自己とは物語であ

る」、「自己とは自己語りによって構築される」という命題であった。

自己がまず先にあってそれが自己の物語を物語るのではなく、自己についての物語、自己を語る行為そのものが自己をつくっていく。…「自己は物語の形式で存在する」といえる。…あらかじめ自己があって自己のことを物語るのではなく、自己についての語りがそのつど、自己をつくり直していくという意味である。…つまり自己は、「自己語り」によって更新されていく。自己を語ることは自己物語を改訂し、更新していくことなのだといえる。（野口裕二、2000、37-38頁）

このように、整序された起承転結の構造をとった狭義の物語の形をとらなくても、語り、語りの断片、日目のつぶやきの総体として表出される自己の物語化が、自己そのものを構築していくというのが、自己物語パラダイムの含意である。自己の準拠点が、出自や地位ではなく、自己をテーマとした自己の語りに還元される。つまり自己が自己の語りに準拠するという考え方である。

また、それは終わる事なき語りでもある。自己が自己を語ることによってつくり出されるというとは、自己は永遠に自己として描ききれないからである。浅野智彦は、こうした構造を、「自己語りのパラドックス」と名づけている（浅野智彦、2001）。自己語りに終わりはない。

それどころか、こうした自己を語る（語り直す）ためのプログラム（商品）がパッケージとして提供される「物語産業」（小林多寿子、1997）が確立されるまでになったといわれる。家族療法、物語療法からデジタル・ストーリーテリングなどはこうした物語産業として括ることはできる（後に述べるように、地域のメディアも地域の自己語りという意味では、同様に物語産業である。）。

自己メディア論もこうした知の系譜に位置する。それが重視してきたの

は、人びとは、言語や図像のようなシンボルを駆使して、そしてそれを時に自らの声で、また電氣的・電子的なメディアにのせて二次的な声・また電子化された文字、さらにアイコンや写真・映像といった視覚表象を駆使して自己が何ものであるのか語るというメディア行為である。

自己とは何か、つまりアイデンティティの希求が強く発露する現代社会では、メディアを通じた自己の物語を紡ぐ旅が、終わる事なき未完のプロジェクトとして続けられる。メディア表現装置が挿入された現代社会、つまりメディア社会では、メディア表現行為を通じて、自己のアイデンティティが物語られ、物語られることで自己に輪郭が与えられる。メディア表現装置は、自己語りの装置という意味で物語装置である。

『自己メディアの社会学』（加藤晴明、2012）やその前書である『メディア文化の社会学』（加藤晴明、2001）で展開された自己メディア論は、最初に述べたようにメディア論・現代的自己論・物語論を交叉させることで抽出した「メディアとは自己を仮託する文化装置である」という命題のもとに展開されている。この命題の意味内容は、「メディアとは自己を語り、自己を構築する文化装置である」ということであった。つまり、自己語り装置として作動するメディアを自己メディアと名づけたのである。その場合のメディアは、情報メディアそのものというよりも、メディア行為の実践過程そのものを含意していた。

### ●文化装置と下位概念としての物語装置

文化装置というのは、もともと社会学者のライト・ミルズが使用してから文化研究の領域で使用されるようになった概念である（Mills,1963=1971）。文化装置という概念は、文化的職業従事者がつくりだす、社会を解釈するイメージ、ステレオタイプ化された意味、そうしたものを組織化するセクターとして使われている。文化的職業従事者、あるいはその従事者に関わる制度の意味でもある。文化装置がつくりだすレンズによって、人々はさまざまな出来事を解釈していくのである。こうした文化装置とい

う語彙を援用して、日本でも『有名性という文化装置』（石田佐恵子、1998）や『非日常を生み出す文化装置』（嶋根克己・藤村正之編著、2001）などの著作も出版されてきた。<sup>1)</sup>

ただ、ミルズの文化装置論は、知識人論・エリート論の文脈に与する議論である。文化的職業従事者の範疇として例示されているのは知識人・芸術家・科学者などである。つまり1960年代の大衆社会論の基本フレームであるエリートと大衆という二分法を前提にしており、文化装置論の裏側には受動的大衆像が描かれている。

今日、この文化装置を使う場合、確かにわたしたちの解釈フレームを規定し、欲望さえも左右させる文化・権力の作動の側面を無視することはできない。石田佐恵子は、有名性という文化装置をめぐる議論のなかで、文化によって規定される現代人の姿を次のように描いている。

私たちが文化について考えるとき、おのおのの個人としての私たちは、既に十分成長し、あるタイプの感覚を形成し、ある言語を使いそれによって思考し、ある文化のある場所で生きてしまっている。…既に私たちはある特定の脈絡のなかである様式の文化を生きており、その脈絡を根底から覆されるような経験でもないかぎり、その文化から引き離されて別の感覚を身につけることはできはしない。…言わば、容易なことで変更がきかないという意味で、ある種の痛ましい経験として、現代文化は生きられている。（石田佐恵子、1998、8-11頁）

こうした、わたしたちをとりまき規定する文化の濃密さを意識しつつも、自己メディア論は、あえてメディア社会の深化は、非専門家・市井の人に文化の担い手になる可能性を大きく開いたという歴史意識を選択している。文化的職業従事者の幅が多く開かれ変質したのであり、ひとりひとりがメディアを駆使して、稚拙であっても専門的職業人でなくても、自己

にかかわる文化の担い手となってきている。人は、自己自身に対して固有の文化的職業従事者であり、自己物語の著者なのである。

メディアに託した人々の欲望や願いはそう変わってはいない。そこにあるのは、表現メディアを駆使して自己を語り、自己を構築するという使用実践であり、そこへの欲望である。

われわれは、本書で自己表現型・自己発信型のパーソナルメディアは、自分の人生を生き直す、書き直す、リベンジする、リセットする装置だという視点を前面に出している。繰り返すがパーソナルな表現メディアの真骨頂は「自己を語る装置」であり、そうすることで「自己を構築する装置」であることである。(加藤晴明、2012、31頁)

ミルズの文化装置という語彙を援用して、それを自己語りの装置に当てはめれば、“物語装置”という概念を造語できる。文化装置は比較的広い概念であるから、物語装置は、物語るというメディア行為に限定された下位概念ということになる。その物語装置がメディア事業として制度化されている側面に焦点をあてれば、小林多寿子のいう物語産業という言い方も可能となる。

すこし複雑な言い方をすれば、自己もまた表現装置そのものという意味では情報を発し自己そのものを身体・声・ことばを通じて語るメディアであり、「自己そのものが、自己を語る文化装置であり、物語装置そのものである」といえる。メディア社会は、そうした生の自己語りに、より気楽に、間絶なく、自己の物語を記号化し、表出・公表・露出するための機器装置と情報サービス事業という社会システムを提供したのである。

かいつまんでいえば、自己とは“本質的な核心をもつもの”、“実存的なものか”であるのかもしれないが、それが不可視なものである以上、自己＝アイデンティティは記号を配列して物語ることでしか姿を現すこと

はできない。つまり自己のリアリティは物語であり、物語として描かれた自己があるだけである。そして、社会のなかでの各種の媒介関係（血縁・地縁・社縁など）が強固さを失い、“自己の準拠点”が括弧としたものではなく、なくなった現代社会では、自己の物語は、パーソナル化したメディアという表現装置によって描かれ、メディアバージョンの自己として創造・再発見されねばならない。そうした描かれたることによってアイデンティティが創造・構築されるというのが、自己物語をベースにした自己メディア論の骨子である。

### ●情報概念と物語概念

自己メディア論では、メディア社会をめぐる他の言説同様に、しばしば物語りと情報発信や情報表現などの語彙を類似概念として使用表してきた。情報と物語をめぐっては、ウォルター・ベンヤミンは両者を対立概念として論じたことが知られている。だが、ベンヤミンの論じ方は、大衆社会批判という文脈での議論なのであり、メディア社会の分析では両者は類似の概念として捉えるべきである。<sup>2)</sup>

ベンヤミンは、情報を報道記事・データのような記録的なものとして捉え、口承の文化における語りを対比していた。

しかし、情報とは、そもそも in form という語源からも分かるように、あいまいな対象に記号という形を与える回路を通じて生み出されるものである。情報ネットワーク論の今井賢一・金子郁容らがあきらかにしたように、情報概念は、データという静的な情報（形式的情報・情報の静的側面）だけではなく、人びとのコミュニケーション過程のなかで発生する意味的な側面（意味的情報・情報の動的側面）をも含んでいる。

意味的な情報は、人びとの連結のなかで、その連結が生み出す文脈のなかで生み落とされ伝達される情報でもある。今井は、それゆえ小さな範囲で特定の人びとの間でたちあがる個性的な意味情報を提供する装置として地域メディアに注目していたのである。地域メディアは、東京中心のマス・



メディアによる画一性に対して、多様性をもつ情報を確保するものであり、そのことによって人びとの連結のあり様を変えるメディアとして捉えられている（今井賢一、1984、80 頁）。

今井・金子は、情報を発信し、共有することで（情報）コンテキストというメディア＝コミュニケーション・システムがつくられていくことを指摘していて興味深い。

一般的にいつて関係を形成するという事は情報をやりとりしてお互いの持つ考えを理解し合うことである。そのことは両者の間に情報の意味を伝える（双方向の）メディア、つまり情報媒体を構築することだとも表現できる。われわれはそのようなメディアのことを「コンテキスト」と呼ぶことにする。…コミュニケーション・システムといていたものをコンテキストの構築と言い直してもよい。（今井賢一・金子郁容、1988、87 頁）

今井らは、情報が相互行為（インターアクション）のなかから生まれること、相互関係のなかから形成されることを指して「情報の動的側面」と名付けたのである。このように情報は、コミュニケーションのなかで意味生成的に発生する＝語られるものであり、ベンヤミンの批判するようなデータとして留まっているものではない。情報と物語は、類似的であり連続的である。

### ●物語論・自己物語論の示唆

物語論パラダイムの示唆をもう少し説明しておこう。ある実体と思われるものが、実はシンボル（言語や記号）によって構築されて生み出されるという発想は、20 世紀末から 21 世紀にかけて台頭してきた構築主義や物語論というパラダイム（思考の範型）によって投げかけられてきた。

物語論は、もともとは心理学者のジェローム・ブルーナーによる「ナラティブ的思考様式」の提起あたりから始まっている（ブルーナー、1986）。それ以外にも、多様な学問領域から立ち上がってきた。浅野智彦はこうした物語論の4つの源流を整理している。

- ①歴史哲学が提起した「物語としての歴史」という視点：例：野家
- ②心理学の「物語としての認識」という視点：例：ケネス・ガーゲン
- ③イデオロギー批判の視点：例：バルト
- ④物語としての自己：臨床心理学の視点

ただ物語論や質的研究といっても、歴史研究に焦点を置く物語論もあれば、ライフストーリー研究に関心をもつ研究、そして臨床・セラピーに関心をもつ研究がある。それぞれ、研究者の関心によって浮かび上がらせようとする方向が違ってもいえる。ただ、それらの研究が21世紀初頭に噴出したことは出版年をみると分かりやすい。

社会学では、厚東洋輔『社会認識と想像力』（1991）、井上俊「物語としての人生」（1996）、「動機と物語」（1997）、「社会学史と理論的想像力」（1997）、片桐雅隆『自己と語りの社会学』（2000）、浅野智彦『自己への物語的接近』（2001）、桜井厚『インタビューの社会学』（2002）、桜井厚・小林多寿子『ライフストーリー・インタビュー』（2005）など2000年前後に相次いで公刊された。<sup>3)</sup>

歴史哲学では、野家啓一『物語の哲学』（1996）がある。

臨床社会学者・臨床心理学の領域では、以下のような出版が相次いだ。小森康永・野口裕二・野村直樹の『ナラティブ・セラピーの世界』（1999）、やまだようこ編著『人生を語る』（2000）、森岡正芳『物語としての面接』（2002）、ブルーナー『ストーリーの心理学』（2002=2007）、小森・野口・野村『セラピストの世界／物語のセラピスト』（2003）、野口裕二『物語としてのケア』（2003）、同『ナラティブの臨床社会学』（2005）、能智正博編『〈語り〉と出会う』（2006）、野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』（2009）

このように多様な方向での質的研究において展開されてきている物語論パラダイムは、シンボル・相互行為・物語（組織化された言語群、秩序化された言語群）などの共通の語彙群と思考の型をもっている。

自己論の研究する社会学者の片桐雅隆は、自己とリアリティについて次のような指摘をする。

- ①自己の構築は、シンボル(言語に代表される記号一般)によってなされる。
- ②自己の構築は、物語の形式をとってなされる。
- ③自己の構築は、相互行為を通じてなされる。

自己という存在が所与のものとしてあるのではなく、シンボル、つまり役割（つまりカテゴリー）、感情、動機を説明する語彙、物語、自己語りなどをとおして、そして人びとの相互行為によって構築される。「自己はシンボルとしての語りによる構築物であり、その枠組は非対象性や対立、あるいは歴史的な幅の中で常に組み替えられる可能性を残している」と指摘する（片桐雅隆、2000）。

野口裕二は、ナラティブ・セラピーが次のような現実観から出発することを宣言している。

- ①現実社会的に構成される。
- ②現実言語によって構成される。
- ③言語は物語によって組織化される。

やまだようこは、人生の物語は、「その人が生きている経験を有機的に組織し、意味づける行為」であり、「人生の物語は、静態的構造ではなく、物語の語り手と聞き手によって共同生成されるダイナミックなプロセスとしてとらえられる。」としたうえで、「物語」を「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義している（やまだようこ、2000、1-3頁）。

物語の共同生成という視点は、情報の動的な側面に着目する情報定義やシンボリック相互行為論と同型であるともいえる。

物語論パラダイムやナラティブ・パラダイムは、多様な学問の世界にひろがるが、その思考の型は似ている。そのパラダイムの骨子は、リアリティ

のシンボルによる「構築」の視点、そしてシンボルの組織化・秩序化における「物語の形式」の主張にある。なぜ、そうしたナラティブ・パラダイムや物語パラダイムが必要なのかについてみれば、それによって描き出されるもうひとつのリアリティを照らし出すことにある。

人文社会科学が、20世紀の終わりから、ナラティブ的アプローチを必要としたの、リアリティが一つしか無いと考える科学論理的思考や単線の時間論（リニアな時間と変動論）への反論にあった。物語論の視点からは、物語こそがリアリティだからである。結局、ナラティブ・パラダイム、物語パラダイムの共通の思考の型として特に留意したいのは、ドミナント・ストーリー（社会的に主流の物語）とは異なる複数の物語の次元、複数のリアリティを紡ぎ出したいという志向である。リアリティは、論理科学的、あるいは計量的な思考様式によって描かれるだけでなく、もうひとつの別の世界によって描かれるリアリティの世界があり、それはナラティブ的な思考様式、そして相互行為的实践（セラピー的関与・対話）によって浮かび上がらせることができる。そうした意味で、「もうひとつの現実がある」こと主張する知なのである。それは、「社会的現実（あるいは生活世界の現実）の複数制」を描くことを可能とする知でもある。

こうした物語論の台頭をうけながら、社会学者の井上俊は、文化社会学の視点から、自分の物語について次のように述べる。

私たちは、自己および他者の人生を（あるいは人生のなかの出来事の意味を）物語として理解し、構成し、意味づけ、自分自身と他者たちにそれを語る、あるいは語りながら理解し、構成し、意味づけていく～そのようにして構築され、語られる物語こそが私たちの人生にほかならないのである（井上俊、2014、12頁）

「経験を意味あるものとする基本形式」である物語の力は、当然のこと

ながらメディアによっても利用される。メディアによって流布される物語、メディアがつくる物語も、私たちに個人の物語だけではなく、歴史や社会を意味づける、秩序立てて理解する形式となる。

このように、個人の語る力同様に、そしてはるかに超える影響力をもってメディアは物語をつくる力がある。2節では、メディアのつくる物語を、地域のメディアの物語力に援用して、地域のメディアが語る自己の地域の物語が、地域の「自己」のリアリティを構築していく論理を展開する。

## 2節 〈地域と文化〉のメディア社会学へ

### ●地域のメディアは、地域の物語装置である

メディアと自己・アイデンティティの関係から生まれた自己物語の知は、個人的アイデンティティの次元だけではなく、より大きな、地域という自己や集合的次元での自己にも当てはまるのであり、時には、ナショナルリズムという形で国家という大きな自己の構築に結びつくこともある。

現象学的地理学の立場から、エドワード・レルフは、場所のイメディアアイデンティティを果敢に論じた一人である。<sup>4)</sup>

場所のアイデンティティは…社会的関係のなかで構造化されている。…いいかえれば、アイデンティティはその場所のイメージが個人的なものであるか集団的なものであるか、あるいは社会的に共有されたものであるかによって異なってくる。多くの場合、こうしたイメージがまさにその場所のアイデンティティであり、イメージの社会的構造のようなものを理解することがアイデンティティ理解の前提であるように思われる。ボールディングによれば、イメージとは、経験や態度や記憶あるいは直接的感情の産物であるところの心的映像であると

想定される。それは情報の解釈や行動の指針として用いられる。…イメージとは、単に客観的現実を選択的に抽象化したものではなく、それが何であるのか、また何であると信じられるのかについての意図的な解釈なのである。場所のイメージは、個人や集団の経験と彼らの場所に対する意図に結びついたすべての要素からなっている。…当のイメージを抱く者にとっては、それらは完全のその場所のリアリティを構成するものである。（E. Relch、1976=1999、143-144頁）

レルフの場所のイメージ概念は、物語概念に限りなく近い。彼は、場所のアイデンティティを、個人的なもの、集合的なもの、そして共有意識（コンセンサス）によって支えられた公共的なもの、さらにマス・メディアによって広められる価値観を共有する大衆的なものを段階的に整理してみせた。<sup>5)</sup>

このようにレルフの場所とアイデンティティをめぐる議論は、場所がそれぞれの個人やアイデンティティと深く関わっており、そしてまたメディアと深く関わっていることを指摘した先駆的な研究である。この場所を、地域と読み替えてみよう。とくに、人にとって意味ある場所としての地域は、人びとにとっての意味文脈を形成する。それが存在することが地域が意味ある場所として立ち現れることの内実である。その場所としての地域のアイデンティティは、集団的・集合的なものであると同時に、今日では、メディアがつくる地域イメージと密接に結びついている。地域のメディアは、地域情報を発信することで地域のイメージを、地域の輪郭を、さらには地域の物語を構築する文化装置・物語装置としてますます重要な機能を果たしていくことになる。

総表現社会といわれる21世紀において、メディアのパーソナル化による私的な自己語りが増える。しかし、それだけではなく、自己語りの欲望は、“地域”のレベルでも、「おらが地域」という意味で多様な地域アイデンティティが噴出させている。近年の、ご当地グルメ選手権、ゆるきゃ

ら、さらに聖地巡礼などの観光開発などは、そうした地域のイメージ表出のひとつの実践プロセスである。寺岡伸悟の語彙をかりれば、そうした実践プロセスは、「地域表象過程」でもある（寺岡伸悟、2003）。

文化装置の下位概念が物語装置であった。自己メディア論を地域に援用するということは、地域を自己物語化のプロセスとして捉え、ひろい意味でも人びとの語りの実践をメディア事業として捉えることである。そうした広い意味でのメディア実践が、文化装置の全域であり、とりわけ地域の自己語りとしての物語装置の全域ということになる。

### ●奄美の〈地域・文化・メディア〉に焦点を当てて考える

こうした自己物語パラダイムを援用して、奄美というメディア溢れる島の自己メディア論を展開することできる。それは、逆に、なぜ、奄美にはメディアが多いのかに対する答えを与えることにもなる。

自己を「島」という「大文字の自己」（この表現もメタファーであるが）に置き換えて、島自身が、島を物語ることによって、島を改めて「島」として再定義していく。“集合的な自己”として島を捉えるということである。その際、集合的の自己は、一つの固形的なものとしてあるのではなく、多層・多様な人びとが実践として語り出すプロセス、島語りの総過程のなかにあることは強調しておきたい。

島という集合的の自己の自己語り装置が、島のメディア群であり、それらは島の文化装置であり、物語装置として作動する。島を語るメディア行為の総体という発想にたてば、島のマス・メディアは当然のこととして、それ以外にも、島の人びとが織りなす島を物語るメディア実践という事業は、物語装置であり、それらも島語りメディアとなる。

こうした島という集合的の自己の物語装置という発想も、「メディアとは自己を仮託する文化装置である」という自己メディア論を起点にしている。自己メディア論の発想は、「メディアとは自己を語り、自己を構築する文化装置である」ということであった。人は、自己を語ることで、自己

そのものの輪郭＝自己というリアリティを生み出す。そうした生み出されたものが自己そのものということになる。語りによる自己の輪郭の創造、自己というリアリティの創造は、島を主語に設定してもあてはまる。奄美という輪郭やリアリティが、そのままあるのではなく、奄美は島語りの総体によってリアリティを確保していく。奄美のさまざまなナイーブに存在する要素を組み合わせ、秩序づける＝物語ることで、奄美の輪郭＝奄美というリアリティが作り出される。

メディアを媒介にした地域語りや自文化の表出は、ある場所（意味ある地域）が自己の強力な準拠点として作動するような地方にいけばいくほど切実である。奄美のような島嶼地域であり、また独自の歴史・文化をもった地域であればあるほど、自地域のアイデンティティを強く表出する必要に迫られる。地域の自己（集合的自己・集合的アイデンティティ）を強く語り地域という自己を造形する欲望は切実である。地域の自意識や文化的アイデンティティはメディアと連環しつつ表出され、そうすることでまた地域自体が今日的な変容をとげつつある。<sup>6)</sup>

現在の奄美は、固有の民俗文化だけではなく、大衆文化やポピュラーカルチャーが重なり合い、マス・メディアやネットとの接触、交流人口の増大によって、固有文化と標準文化とがせめぎ合うアリーナでもある。そうした情報と文化のつぼのなかで、地域という自己の、地域のなかの1人1人の自己の存亡をかけた情報発信＝自己語りとアイデンティティの構築が営まれている。「無印都市」といわれるどこにでもある標準化された都市の若者のメディア文化消費のくったくのなさに比べて、その真摯さと深刻さは圧倒的な質感をもつ。こうした実存的質感をもったメディアを媒介とした地域語りや自文化語りは、奄美だけではなく、日本中であるいは世界中で起こっているメディア社会のもうひとつの姿でもある。

奄美における地域の自己語り、つまり島語りは、情報発信という言葉と重なり合う。それは、出版・放送・講座などの公共的空間に向けて、強い使命をもって島の文化や島の個性を語る人びとの語りを含んでいる。地域



のなかで、強い使命感をもって地域語りを事業として実践し、ある実績をあげ、当該地域で評価され、レスペクトを獲得している人びとに焦点を合わせている。そうした島語り人を、「文化媒介者」と名づけたい。そうした「文化媒介者」の実践の総体が集合的アイデンティティの内実であり、その活動によって多層で包括的で複合的な地域アイデンティティ（総体としての地域アイデンティティ）が醸成されていくと考えているからである。

地域活性化論や地域情報化論文脈では、島語り人を「地域職人」（河井孝仁・遊橋裕泰、2009）としてカテゴリー化する研究もある。「島語り」や「文化媒介者」は、そうした概念と重なりあいつつ、より広い文化の継承・創生活動の担い手を包み込んだカテゴリーとして提起している。

こうした意味では、語りや物語の語彙を使いつつ、地域の自己メディア論は、臨床的なセラピーの対象となる人びとのナラティブや物語ではなく、物語られる社会の担い手や語りの機能にある。臨床的なナラティブ・アプローチとは照らし出そうとする対象が異なるからである。

### ●既存の研究を超えて

さて、メディア研究は、こうした生々しい地域の自己語りの希求とメディアが結びついて変容する文化の姿とどれだけ向き合ってきたであろうか。そもそも地域への時間をかけたフィールドワークを起点にして、つまりある特定の地域に準拠して地域のアイデンティティや文化の変容する姿を考察してきただろうか。地域に準拠し対峙するメディア研究は、同時に、「メディアとはそもそも何か」「メディア研究とはそもそも何か」を問い返すことにもつながる。

こうした“メディア・地域・文化”を連環させる視点、さらに地域アイデンティティや自己語りを連環させる視点は、これまでの地域研究、地域メディア研究、市民メディア研究、メディア文化研究が抱えてきた視点の狭隘さを超えたいという問題意識から出発している。自己メディア論を起

点に、ある地域（ここでは奄美）と文化を読み解いていくような研究を通じて、従来の地域メディア研究を脱構築する。そうした試みを「〈地域と文化〉のメディア社会学」として提起しておこう。

まず従来の地域とメディア研究の問題点を3点に整理しておこう。

その1：従来のメディア研究の多くは、大都市の若者のメディア利用研究、あるいは流行の先端にあるメディアのコンテンツやメディア行動に焦点を当てた研究である。それ以外のメディア研究も、多くが大都市郊外や地方都市の若者のメディア研究に限られていた。インターネット社会の研究も、多くは大都市の利用者や若い世代の利用者に焦点を当てた研究である。

その2：地域メディアの研究も特定の「業界」「事例」の研究に偏りがちである。極論すればケーブルテレビ研究とコミュニティFM研究に過度に焦点をあてがちである。しかも市民放送局、NPO放送局や多言語放送局などのように理念を文字にして高く掲げた事例に、そして研究者がそうした“先進事例”詣をし、そこで接する代表者たちの美しい自賛の語りをそのまま“すばらしい”と評価し、メディア実践の代表事例として描き出してしまう。その結果、とりあげられる事例がみな同じになるという結果を招いてきた。自作自演自画自賛が増幅されていく構図である。

こうしたマス・メディア研究の視野の狭さに比べれば、地域活性化論・地域情報化論の方が地域の多様な実践の発掘を掘り起こしてきてはいるが、その研究も多くは全国の先端的な事例の紹介や羅列とそのモデル化にとどまる傾向が強い。

その3：他方で、地域研究は、メディアという視点に鈍感であった。地域研究は、長い間、地域組織や地域構造という「実体」と見えるものに固執し、地域を固形的・実体的なものとして捉えつけてきた。メディアと結びついて地域そのものが構築されていくプロセスに注目することは少なかった。それは、地域そのものを自明視せずに、地域は住んでいる人びと、関心をもつ人びとにとって〈情動的リアリティ〉として存在という構築主

義的視点をもっていなかったからである。地域は、メディアという文化装置・物語装置を媒介にして、つまり地域のメディア媒介的な自己語りを通じて、〈情動的リアリティ〉を確保する。メディアバージョンとしての地域という集合的な自己の自己物語の輪郭＝地域イメージが浮かび上がるのである。

メディア・地域・文化を連環して捉えることで、地域をメディア媒介的に構築される〈情動的リアリティ〉という視点から論じるとともに、そのリアリティの内実としての文化をも同時に視野に入れることができるようになる。しかも、伝統的な民俗文化から大衆文化、ポピュラー文化までを、〈情動的リアリティ〉の内実として組み入れることができる。地域の文化を論じることができるようになるだけでなく、メディアそのものを生活から遊離した真空状態のなかで論じるのではなく、人びとの生活の文脈、つまり生活様式＝文化のなかで論じることが可能となる。また逆に、その一見固有と見える生活自体の変容、さらに固形的なものとして捉えられてきた民俗文化の今日的な変容をも描きだすことができる。地域固有の文化も、今日では、広い意味でのメディアと結びつくことで〈メディア的展開〉をとげつつある。

### ●媒介概念としての〈自己コンテクスト性〉

自己メディア論的な視点からみれば、地域は、物理的境界をもつものとして、あるいは制度・政策のネットワークの管轄域として、そして文化の担い手が活動する場所として、そして、〈自己コンテクスト性〉をもつ場所として多層に存在しているということになる。

〈自己コンテクスト性〉とは、ある意味域が成立しているということ、人びとにとっての意味が共有される文脈のことであり、ある人びと（住んでいる人びと、あるいは出身や関心ある人びと）にとって、ある領域が有意味的＝意義がある地域として位置づけられているということである。〈自己コンテクスト性〉が成立しているということは、ある地域が、ある人び

とにとってアイデンティティ付与的な場所として成立しているということでもある。そのことが、住んでいる人びとにとって〈情報的リアリティ〉があるということにつながる。

ジグムント・バウマンは、ド・サングリーを引き合いにだしながら、こうしたアイデンティティのありようを、「碇を降ろす・あげる」という比喩で表現している。

さまざまな寄航港に次々に碇を降ろす船と同様、生涯の旅の途中で承認を求めて「準拠のコミュニティ」に立ち寄る自己は、寄港地ごとに、自らの資格をチェックしてもらい、承認してもらって、それぞれの「準拠のコミュニティ」から提出される紙に、自分自身の要求を記します。…逆説的なことは、自己解放のためには、強力で多くの事柄を要求するコミュニティが必要です。…自己創造の作業を達成できるという裏づけは、一つの権威、つまり、承認を拒む力をもっているがゆえに、その承認に価値があるコミュニティだけが提供できるので。 (Z. Bauman,2004=2007、11-12 頁)

バウマンの比喩は、アイデンティティを可変的・可動的なものとして捉えている点に特徴がある。〈自己コンテクスト性〉も、地域に住んでいる人びとだけではなく、多様な人びとに開かれているという意味で、さらに可動的であるにも関わらず、あるコミュニティ（われわれの研究の場合には、奄美）の力が強く作動するという両義性をもっていると考える点ではこれに近い。

またメディア発信による自己語り（奄美での島語り）、つまり〈メディア版としての地域〉の構築という視点をいれることで、地域を〈素朴実感的なリアリティ〉をもつ固形的な概念から解放することができる。つまり地域を、より複数的で輪郭が流動的なリアリティをもつものとして位置づ

け直すことができるようになる。例えば、奄美という文脈で考えれば、ナショナルコンテキストからみた地域（奄美）と、県域からみた地域（奄美）と、ひとつの地域（奄美大島）からみた地域（奄美）と、他の地域（徳之島）からみた奄美とでは、それぞれの〈情動的リアリティ〉が異なる。そこに住み、地域を意識する人びとの〈自己コンテクスト性〉が異なるからである。たとえば、徳之島に行くと、人びとの口からは、「あまみ」という語彙は発せられない。自分たちにとってのアイデンティティ付与的な場所は、「とくのしま」なのである。このように、それぞれの地域のなかで暮らす人びとが、意味づけ自己を物語る地域の〈自己コンテクスト性〉が異なるからである。現代社会は、自己という輪郭が曖昧のように、地域という集合的自己の輪郭も曖昧で流動的である。

われわれは、「情動的現実としての地域」（加藤晴明、1997）や『《情報》の社会学』（加藤晴明、1994）などで情報化の視点から地域を論じてきた。そこにあったのは、構築主義的視点、広い意味での情報化の視点から地域を捉える視点である。つまり地域は、エリアとして、あるいは歴史的に固形的なものとしてあるだけでなく、地域は地域に関わる情報が発信されることで、そうした情報が素材として、物語として語られることで構築される。

もちろん、その語りは一つの物語として結果するわけではない。地域におけるひとり1人のメディア媒介的自己語りの総体として地域の物語の総体が形成されるのであり、地域の〈情動的リアリティ〉は多層で多様でもある。その多層で多様な地域語りの主体を総体として把握する総過程の視点が必要なのである。〈地域と文化〉のメディア社会学は、そうした地域における自己語りの総体を意識し、その文化装置・物語装置の総過程を把握する試みでもあらねばならない。

他方、〈地域と文化〉のメディア社会学は、物語論の知を使いつつ、セラピーやライフストーリーそのものに関心を向ける必要はない。重要なのは、地域はシンボル（言葉・記号・表象）を表出することで生成されると

いう構築主義的視点であり、〈情報のリアリティ〉や〈自己コンテクスト性〉というアプローチが開く説明力の可能性を切り拓くことにある。

### ●地域のメディア社会学

さまざまな情報を、組織化し秩序づけたものが物語といわれる。物語は、ストーリー（時間的配列）やプロット（因果関係）をもつ。また語る（情報発信・情報表現）という行為と語られた作品（情報内容）という側面をもつ。島語りは、島についての物語りであるだろうし、島語りメディアとしての地域のメディアは、島の物語装置・物語産業ということになる。

地域情報を発信し続けている島の地域メディア、新聞もテレビもラジオも出版も、ネットのウェブサイトやSNSも、全ては島語り（人）であり、物語装置ということになるだろう。

ただ、地域のメディア研究において肝要なことは、語りや物語という語彙にあるのではなく、その島語り人の裾野の広がりを考えることである。つまり島語りの“総過程”が論じられる必要がある。島語りの総過程に関心をもつなら、マスコミ的な情報発信に典型的にイメージされる、情報発信、印刷物の発行、放送、ネット掲載そうした全てが地域メディアの総過程を形成する。

島語りは、島にある文化資源を改めて語ったり、再発見したり、語り直す実践でもある。最近では、地域の資源を活かした観光開発論や地域の文化資源の掘り起こしに際して「物語＝ストーリー」型の開発やまちづくりが語られる。

奄美という地域の情報メディアは、直接的に奄美を語る文化装置・物語装置である。その中にもグレードがあり①ストーリー次元、②. 生活世界のエピソード次元、③. 象徴（シンボル）次元、④. 素材次元などである（『〈地域と文化〉のメディア社会学』の第2論文で詳細を述べる）。

情報メディア（事業・産業）としての地域のメディアのなかでは、奄美という島の物語は、ふだんは生活世界のトピックのなかで語られ、そして

時に、奄美そのものの定義をめぐる直接的に語られる。奄美語りは、番組や記事として独立している場合もあれば、個々の生活のなかの語りのなかで交通情報からイベント情報などのトピック情報として、素材的に、背景的に語られる場合もある。しかし、その両方が、融合しながら奄美の〈自己コンテクスト性〉を形成していく。

奄美大島のコミュニティ FM4 局のなかでも、あまみエフエムは、「島っちゅの島っちゅによる島っちゅのためのラジオ」というメッセージのように、島のアイデンティティ形成に強い使命感をもって望んでいる情報メディアである。開局当初に比べても放送内での奄美語（いわゆる島口・かつての方言）が語られる割合も増えている。それも、日常放送のなかの挨拶や会話なので堂々とした奄美語が語られている。スタッフの奄美語能力も飛躍的に向上した。

こうした生活世界のなかでの島語りに加えて、「放送ディ！学」のように、「奄美とは何か」をストレートに語る番組もある。もちろん、ラジオというメディアは、それ自体、登場する人物に代弁的に語らせる間接話法のメディアである。テレビが、ナレーターの語りによって締めくくるのに比べて、ラジオは、登場人物の語り時間が長時間、比較的自由に時間が割かれるナラティブなメディアである。

もちろん、奄美語りは、新聞の方が長い歴史もあり、またたいの新聞記者たちは直接的な語りの言語能力を備えている。奄美では、南海日日新聞をはじめとした島の新聞がそうした島語りのもっとも重要な役割を果たしてきたことは間違いない。

こうした多層的・多様な地域語りの担い手が〈地域と文化〉のメディア社会学の、地域に相当する研究領域ということになる。

## ●文化のメディア社会学

情報メディアはある意味では直接的な島語りであり、それは狭義の地域のメディアである。これに対して、奄美語りの担い手をより間接的で背景

的なものにまで拡げると、もっと大きな文化活動が地域の語り部の領域にはいつてくる。そうした奄美における文化の継承・創生・発信は、〈地域と文化〉のメディア社会学の、まさに文化に相当する部分となる。

また奄美のうた文化を例にとれば、島唄の継承活動を献身的に担う島唄教室の主宰者、その舞台のひとつである公民館講座、そうした島のさまざまな文化活動も、あるいは学校の中で展開されている郷土学習も、全てが島語りということになる。

つまり、すでに述べたように直接的な語り装置としての情報メディアに対して、中間的な語りとしての文化の伝承・創生・発信の活動があり、さらに食・クラフトといったモノを通じた語りの領域さえもが島語りの対象となってくるのである。

例えば、奄美の代表的な民俗文化として島唄があるが、この島唄は、〈レコード化〉〈ステージ化〉〈標準化〉といった近代的な展開を経て、「島唄」（カッコ付きのしまうた）として構築され続けている。それは、ホブスホームがいう伝統の創造という次元よりも、〈メディア的展開〉といった方がわかりやすい。伝統文化もまた今日では、“メディア化された文化”なのである。この伝統文化のメディアとの結びつき＝〈メディア的展開〉としてどこでも生起している普遍的な主題であり、地域研究も、地域メディア研究も文化研究も、こうした文化とメディアとの結びつきに正面から向かいあってはこなかった。

こうした多様にひろがる文化の担い手に対しては、最近では〈文化媒介者〉という言葉が使われたりする。〈文化媒介者〉とその活動は、広義の地域のメディアといえる。こうした広義の地域のメディアが、互いに関連して奄美の広義の文化装置・物語装置として作動していく。今日の奄美では、そうした〈文化媒介者〉も含めた地域のメディア実践が、「奄美らしさ」「シママッチュ」という奄美アイデンティティの現代的な覚醒を生み出している。

地域メディア論と名づけられ従来の地域のメディア研究では、こうした



文化活動の領域は対象にならなかった。田村紀雄の初期の地域メディア論には、こうした文化活動の視野をもっていたのだが、その後の研究は、結局、ケーブルテレビ、コミュニティFM、ネット系メディアといったメディアの種類とその可能性の紹介にとどまってきたのである。

## 結び

すでに述べてきたように、日本の地域メディア研究・市民メディア研究や地域情報化の研究は、地域の意義を強調しつつ、特定の研究に正面から向かいあうような研究が少ない。寺岡伸悟の吉野に準拠した『地域表象化過程と人間』のような例外的な研究もあるが、どこまでも地域研究とみなされている。メディア研究の多くは、先進事例探しやメディア実践モデル探しに終始してきた。あるいは、研究者自身が市民メディア実践に関与したり、メディアワークショップとよばれる批判的なメディア実践をたちあげ、それを自画自讃するような議論をくりかえしてきた。日本の地域のメディア研究は、テクノロジーとしてのメディアにこだわるあまり、地域へのこだわり、そして文化活動を視野に組み込んでいくような試みが不十分であった。

地域メディアとしてケーブルテレビやコミュニティFMといった次々に登場するニューメディアの種類や地域メディアの類型図の研究は進んだ。しかし、地域に配置されているメディアの総過程とその担い手に向かい合う研究はほとんどなされていない。われわれが、奄美での研究で得た知見から、地域メディアを主語にするのではなく、“地域のメディア”や“地域の文化”を主語にする論考にこだわる理由もそこにある。

地域のメディア研究というなら、ある一定の期間ひとつの地域と対話し、そこから立ち上がるメディア研究の先に見えてくる地平と対話するという思考の実験を企画し、その調査研究の先に、現地との対話のなかから

湧き出てくる視点やコンセプトを理論的なフレームとして整理することが必要なのではないだろうか。

結論が先にあり、そのための都合のよい事例を探したり、研究者の理想を事例に被せるような自作自演・自画自賛のようなメディア実践の美しい物語ではなく、文字通り、フィールドにおける出会いと発見があり、そうした事例の位置づけや総括をめぐる考察を経ながら理論フレームを再構築していく。それが地域のメディア研究の醍醐味といえる。

以上、自己メディア論を起点にして、地域の自己メディア論の必要性を論じてきた。議論が抽象的にならないためにも、奄美という特定の地域に準拠して議論を進めてきた。

奄美を自己語りメディアが溢れる島と位置づけ、その語りの文化装置がなぜ奄美で必要であったのかも若干論じてきた。そうした島語りの装置を、文化装置・物語装置として捉えるとともに、地域と文化とメディアとを連関させる社会学の必要性と可能性を提起してきた。それは、広義の地域メディア論という語彙であらわすことも可能であるだろう。さらに、〈地域と文化〉に焦点をあてたメディア社会学を強調するなら、「〈地域と文化〉のメディア社会学」ということなるのである。

#### 補足1:

本稿では、何カ所か「われわれ」という表記をつかっている。筆者の論考の特徴でもあるのだが、単に私の私的な感性・感傷の表現ではなく、方法論的な立ち位置の選択をする意味で「われわれ」表記をとっている。本稿の立ち位置は、個人主義的・主観的な還元主義という批判を浴びるであろう。その批判を想定しつつ、なぜ、このような立ち位置をとるのかを述べてきたつもりである。くりかえすが、研究者としての方法的な立ち位置を包括する語彙として「われわれ」がある。

補足2:

筆者は共同研究者（寺岡伸悟氏・奈良女子大学）とともに、2008年から2015年にいたるまる7年間、奄美の地域メディアと文化について研究してきた。これまでの成果はその都度の試作的論考としてまとめられた。それらは、すべて『中京大学現代社会学部紀要』に共著で発表されている。

「メディアとパトリの島・奄美」(2010)

「奄美における地域メディア研究のための予備的考察」(2012)

「奄美のうた文化と文化変容論」(2012)

「奄美群島・喜界島と文化メディエーター」(2013)

「奄美大島の唄文化と文化メディエーター」(2014)

「地域メディア研究方法論の再考」(2015)

■ 〈注〉

- 1) 社会学者ライト・ミルズは、文化装置について、観察者、解釈センター、表現本部などの語もつかっているが、彼が繰り返して使っているのは、文化的職業従事者という語彙である。この文化的職業従事者、あるいはその従事者によって生み出されるイメージ、意味のステレオタイプを生み出すものが文化装置の内実と同義と考えてよいだろう。

「観察者、解釈センター、表現本部に依存する度合いがますます多くなりつつある。現代社会においてはねそれらは、私が文化装置（cultural apparatus）と呼ぼうとしているものによって設立されるのである。」（邦訳、322頁）

「文化装置のなかで、芸術、科学、学問、娯楽、情報が生み出され分配される。それによって、これらの生産物は分配され、消費される。それは学校、劇場、新聞、人口調査局、撮影所、図書館、小雑誌、ラジオ放送網といった複雑な一連の諸施設をもっている。」（同、323頁）

「文化装置は、人びとがそれを通して見る人類のレンズであるといえよう。人びとはその媒介によって自分たちが見るものを解釈し報告する。」（同、323頁）

文化装置論が収められた、POWER, POLITICS AND PEOPLE が過去論考を集めて出版されたのは1963年である。その前年1962年には、ダニエル・ブーアスティンのTHE IMAGE(邦訳、『幻影の時代』)が出版されている。文化装置や文化的職業従事者の言説は、ブーアスティンが描いたグラフィックス革命とその従事者たちに関わる言説と同型ともいえる議論である。1960年代は、マスコミの発達もあり、社会のイメージ、価値観、ステレオタイプ、意味づけなどを与える情報生産の専門家層に焦点が当てられ、それを社会のエリート層として位置づける思考の形が出揃ってきた時代だったといえよう。

- 2) 「情報」と「物語」という語彙を使う場合には、ベンヤミンの有名な区別がある。ベンヤミンは、単なるデータとしてのマス・メディアが送り出す「情報」と、「物語」を峻別し、「情報」を批判していた(W. Benjamin, 1922)。

ベンヤミンにあるのは一種の二元論であった。一方には、「口から口に伝わっていく経験」、「生きた語りの領域」という物語の源泉の世界があり、物語からは情報にはない振幅が得られる。それが近代市民社会のなかでとりわけ、新聞などのマス・メディアの発達によって、物語る技術の終焉、物語の衰退に向かっている。「高度資本主義下の最も重要な支配の道具」としての「新聞」がもつ「伝達形式」が、決定的な影響をもつ。それは物語の精神とは相容れない。

「情報のほうは即座に検証可能であることを要求する。そこにおいては、『それ事態で理解できる』ものとして現れることが最も重要である。」(W. Benjamin, 1936=1996, 295頁)

「情報は、それがまだ新しい瞬間に、その報酬を受け取ってしまっている。情報はこの瞬間にのみ生きているのであり、みずからのすべてを完全にこの瞬間に引き渡し、時を失うことなくこの瞬間にみずからを説明し尽くさねばならないのだ。物語のほうはこれとはまったく異なる。物語はねみずからを出し尽くしてしまうということがない。物語は自分の力を集めて蓄えており、

長い時間を経た後にもなお展開していく能陸があるのだ。」(W. Benjamin、1936=1996、297頁)

「真の物語」という語彙をつかうことで、ベンヤミンは、新聞のようなマス・メディアのつくる物語と、生きた語りの物語と差異を強調しているわけだが、今日では、ベンヤミンが求めた真の物語はますます困難になりつつある。マスコミに代表されるメディアによる物語創作を前提にしつつ、そのメディアによる物語創作=情報発信の構図が東京・京都を中心にドミナントストーリーをつくってきたことこそを問題にしなければならない。メディアによる物語づくりという戦場を前提にして、中央中心のストーリーと島自らが発する語り=情報発信との相克が主題視されねばならないのである。

その意味では、今日からみて、マスコミがつくる物語=虚偽の物語=情報であり、真性の物語の世界が口承文化の中にあるというのは、あまりに単純な本質論(つまり、本物の物語がある論)である。この区別は、ベンヤミンが情報概念をあまりに形式的に、物語の論敵として意図的にとらえロマン主義的・貴族主義的なバイアスに起因している。割り切った言い方をすれば、ベンヤミンの区別は、問題提起としては正しく、概念定義としては間違っている。彼の二元論的な区別は、彼を追いつけるファシズムの情報宣伝の弊害を意識して生まれたマスコミ=情報批判であったともいえる。

- 3) 物語論パラダイムと似たものに、ライフストーリー論という方法論がある。その狙いは、例えば、ネット空間での人びとの饒舌な自己語りにあるのではなく、自己を語り得ない人びとへのインタビューによって、ふだん語り得ない人びとの思いと語りを引き出し、またそのインタビューという語り合いの間合いのなかに含まれる語られないものを斟酌することで、人びとが抱えている複数の生のリアリティの有り様を模索していくといくことを目指している。その点ではそうした相互行為状況のなかで他者の語りを引き出し、他者の複数の生のリアリティを紡ぎ出していくことを指向する臨床心理系の物語論やナラティブ研究とは向かう方向が違うといえる。

- 4) レルフは、場所のイメージとアイデンティティについて論じた際に、3つの場所イメージ（アイデンティティ）を区別している。個人的場所のイメージ＝アイデンティティ、集団ないし共同社会（コミュニティ）の場所イメージ＝場所アイデンティティ、そして共有意識（コンセンサス）となった場所イメージ＝場所アイデンティティの3層の場所＝3層のアイデンティティを指摘している。さらに、アイデンティティの最大公約数である「共有意識となった場所のアイデンティティ」は、「公共的アイデンティティ」と「大衆的アイデンティティ」という二つの形をとる。前者は、いろいろな社会集団に共通するアイデンティティであり、かなり表層的なレベルでの関心に依拠して場所の集団的イメージを束ねたものと位置づけられている。後者は、マス・メディアを通じて広められる、表層的な場所のアイデンティティであり、価値観では一致しつつも気まぐれで寄せ集めに生み出されたまことしやかに作弄的なステレオタイプであるという（レルフ、1973=1999、149頁）。
- 5) 2014年秋におこなわれた沖縄の県知事選挙は、「オール沖縄対ヤマト」という物語のなかで展開されオール沖縄の勝利で終わった。そうした沖縄ナショナリズムの噴出には、沖縄の人びとの運動が存在する一方で、「オール沖縄」というカテゴリーが生み出され、それが沖縄のマス・メディア（沖縄では地元2新聞が読まれ、全国新聞は殆ど読まれていない。）によって増幅され語られるなかで、対立の構図はより明確となった。このようにメディアは集合的自己のレベルでも自己を語り、自己にアイデンティティを与える文化装置である。『オール沖縄 VS. ヤマト』（2014）で、著者の山田文比古は、基地問題とは質的に異なる、沖縄のアイデンティティの噴出を次のように語る。
- 「沖縄の人々にとって理不尽な仕打ちとしか思えない対応を、日本政府や本土の人々を取り続けるのであれば、沖縄は沖縄で、自らのアイデンティティを主張し、自己決定権の下で、過重な基地負担を拒否しようという動きが、沖縄の保守層にまでひろがってきている。」（9頁）、「翁長雄志市長…が強調するのは、イデオロギーで対立するのではなく、沖縄県民のアイデンティティで

心を一つにして結束しようということだ。」(14頁)

こうした沖縄アイデンティティは、地理学者のエドワード・レルフの区分に従えば、大衆的アイデンティティということになる。

- 6) 日本には、こうした地域と文化とメディアの連環を研究するのに適した地域は他にもあるだろう。そのなかで、離島はエリアが限られていることもあり、地域や文化を可視化しやすいという理由もあって奄美に照準が当てられた。また、本文中に触れたが、奄美は既存のメディア産業が揃っているというだけでなく、歴史的経緯、そして文化の伝承と創生が盛んな島としても魅力的なフィールドである。メディアと地域の文化と観光が結びついているそうした文化事業の視点からも、今後ますます注目を浴びていく島といえよう。

#### ■参照・参考文献

- 浅野智彦 (2001) 『自己への物語的接近』 勁草書房
- 浅岡隆裕 (2011) 『メディア表象の文化社会学』 ハーベスト社
- Zygmunt Bauman and Benedetto Vecchi (2004), *Identity*. Polity Press. = (2007) 伊藤茂訳 『アイデンティティ』 日本経済評論社
- Walter Benjamin (1936) = (1996) 「物語作者」 『ベンヤミン・コレクションⅡ エッセイの思想』 筑摩書房
- 井上俊 (1996) 「物語としての人生」 『岩波講座現代社会学9 ライフコースの社会学』 岩波書店
- 井上俊 (1997) 「動機と物語」 『岩波講座現代社会学1 現代社会の社会学』 岩波書店
- 井上俊 (2014) 「現代文化のとらえ方」 井上俊編 『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』 世界思想社
- 片桐雅隆 (2000) 『自己と語りの社会学』 世界思想社
- 加藤清明 (1997) 「情動的現実としての“地域”」 『社会と情報』 第2号、東信堂
- 加藤清明 (1994) 『《情報》の社会学』 福村出版

- 加藤晴明 (1993) 『メディア文化の社会学』 福村出版
- 加藤晴明・寺岡伸悟 (2010) 「メディアとパトリの島・奄美～地域からの情報発信とその文化的苗床との連関を焦点にして～」『中京大学現代社会学部紀要』 第4巻第1号
- 加藤晴明 (2012) 『自己メディアの社会学』 リベルタ出版
- 小林多寿子 (1997) 『物語られる人生』 学陽書房
- 厚東洋輔 (1991) 『社会認識と想像力』 ハーベスト社
- 厚東洋輔 (1997) 「社会学史と理論的想像力」『岩波講座現代社会学 別巻 現代社会学の理論と方法』 岩波書店
- Wright Mills (1963) *Power, Politics and People*, Oxford University Press. = (1971) 青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』 みすず書房
- 中河伸俊・他編 (2001) 『社会構築主義のスペクトラム』 ナカニシヤ出版
- 野口裕二 (2003) 『物語としてのケア』 医学書院
- Ray Oldenburg (1989), *The Great Good Place, Da Capo Press.* = (2013) 忠平美幸訳『サード・プレイス』 みすず書房
- Edward Relch (1976), *Place and Placelessness*, Pion = 高野他訳 (1999) 『場所の現象学』 筑摩書房
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学』 せりか書房
- 桜井厚 (2010) 「ライフストーリーの時間と空間」『社会学評論』 60 (4)
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー』 せりか書房
- 桜井厚 (2006) 「ライフストーリーの社会的文脈」能智正博 (2006) 『〈語り〉と出会う』 ミネルヴァ書房
- 寺岡伸悟 (2003) 『地域表象過程と人間』 行路社
- 上野千鶴子編 (2001) 『構築主義とは何か』 勁草書房
- やまだようこ編著 (2000) 『人生を物語る』 ミネルヴァ書房
- 山田文彦 (2014) 『オール沖縄 VS. ヤマト』 青灯社



創生のメディア的展開とアイデンティティ形成に関する研究」(課題番号 25511016)、研究代表者：加藤晴明、共同研究者：寺岡伸悟(奈良女子大学)・久万田晋(沖縄県立芸術大学)、研究年：平成 25 年度～27 年度、に基づいた研究の成果の一部である。